

正念寺だより

2013年
9月 1日 発
行NO.164

九月 聞法会 (もんぼうかい)

とき 九月 十日 (火)

午後二時〜 勤行 法話1席

法話 近藤 正嗣 師

真宗仏光寺派布教使
東京・照明寺副住職

※ 読経の練習と法話のつどい
参加費 五〇〇円

とき 十月 九日 (水)

午後二時〜 勤行 法話2席
午後七時〜 勤行 法話1席

法話 小林 顕英 師

浄土真宗本願寺派布教使
大阪市旭区・法英寺住職

報恩講は真宗の宗祖親鸞(しんらん) 聖人のご命日の法要で、真宗寺院では年間行事の最も大切な法要です。多数のご参詣お待ちしております。

生 杉山 平一

ものをとりに部屋へ入って
何をとりに来たか忘れて
もどることがある
もどる途中でハタと
思い出すことがあるが
そのときはすばらしい

身体がさきにこの世へ出てきて
しまったのである
その用事は何であったか
いつの日か思い当るときのある
人は幸福である

思い出せぬまゝ
僕はすくすくあの世へもどる

八月の初旬に、同朋大学の池田勇諦先生の講演を聴いた。聴衆に対して大変厳しい言葉を投げかけられました。

要約すると、私たちは現実主義者であると。目の前の楽しみにうっとりとして暮らしておる。「仏法に生きる」とは、



「人間に生まれたことが喜ぶのか、の一点を問いつけることであると。私は話しを聞きながら、杉山平一氏の詩「生」を思い出した。杉山は詩の中で「この世に生まれてきた用事は何であったか」「何しにこの世へ出てきたのか」と問いかけてます。
私たちはきつと、「子供のため・家族のため・会社のため・地位・名誉・財産・健康のため」と、今日の前にある幸福を得るためと答えるでしょう。
しかし、人生は不条理でかつ思うようにはいき

ません。「〇〇がため」としがみついたものも、日々移り変わっていくものばかり・・・
この夏家を出た三人の息子達も、次男が一泊帰ってきただけ、「子供のため」との親のがんばりも、当人達は意に介せぬようである。スーパー銭湯で会った楽しい父・息子を見ては「うらやましい」とまたまた、無い物ねだりの「愚痴・ぐち」が出る。
人間に生まれたことが喜ぶか？秋の夜長、もの思いにふける大きなテーマをいただいた。

地蔵盆の風景

